



# ウェアラブル端末の発展から見る 台湾市場の商機(下)

前稿では、台湾のウェアラブル端末市場の現状について紹介したが、本稿ではそれら端末が今後更に台湾市場に普及するために必要となる条件と、日本企業の参入機会について紹介する。

## 台湾市場におけるウェアラブル端末普及のポイント

前回紹介したように、台湾におけるウェアラブル端末は現時点において依然として研究開発の段階である。今後台湾市場のニーズに合った商品を普及させるためには、普及に当たり同じような経緯をたどった遠距離医療サービスの例を参考にし、開発に反映させる必要がある。ウェアラブル端末普及に向けた主な課題は以下2点である。

1点目は、計測の正確性である。これまで台湾で提供されてきた血糖値や血圧を遠距離モニタリング・管理するサービスは、測定器の精度の問題や、ユーザーの測定が不定期である等の理由から、収集されたデータの分析が当初の予想より進まず、ユーザーの長期的な利用に結びついていなかった。情報転送の即時性や利便性が強く求められる健康管理端末では、研究開発段階でこうした標準機能の更なる強化必要である。

2点目は、台湾の医療機関の状況と関連する。台湾には約500ヶ所の大型病院及び2万ヶ所以上の診療所が存在し、医療サービスを受けやすい環境となっている。更に単一の健康保険制度(全民健康保険)も整備されており1回の受診料も比較的安価なため、日頃から定期的に健康データを管理するより、いざ体調不良になった際に直ちに病院に赴き受診するという傾向が強い。こうした医療環境にある台湾では、現在市場に出ているスマートウォッチ等のウェアラブル端末における健康関連機能は、主に心拍数や運動量等の計測がメインであり、病気の予防に当たる健康関連データの収集及びモニタリングに関しては、ユーザーの支持を得にくい恐れがある。そのため、ウェアラブル端末の普及のためには、健康データ管理のみを目的とするのではなく、消費者が負担できる金額の範囲内で、娯楽性のあるサービス等を提供するようなビジネスモデルを確立する必要がある。

## 日系企業による台湾ウェアラブル端末市場への参入

前稿で紹介した通り、台湾のウェアラブル端末市場は、リストバンドや腕時計タイプの国際的ブランドメーカーの商品が主流である。また、台湾事業者が研究開発に注力しているのは主に端末(ハードウェア)の部分である。しかし、この分野においてトータルサービスを提供するためには、ハードの他、関連データの収集・分析・ユーザーへのフィードバック等に必要なプラットフォームとなるソフトの部分が必要である。このため、ユーザーの長期的な利用を目指し、Acer、鴻海(Honghai)集団等の主要事業者は、ソフト面の開発及びサービスを同時に強化していきたいとの意向を示している。

一方、日本ではこのような関連データ分析の分野において研究開発及び応用面で台湾よりも進んでいる。その一例として、2013年からソフトバンクはリストバンド型活動量測定計「Fitbit Flex」のサービスを開始(月額1,058円)しており、専用アプリケーションを通して活動量を記録し、スマートフォンでカラダの状態をチェックすることができる。

筆者が直近で台湾IT事業者や端末販売事業者へヒアリングを行った際にも、数多くの事業者がソフト面に強いパートナーと連携し、ウェアラブル端末のトータルソリューションを提供したいと希望している。台湾に不足しているデータ分析などのソフト面において、日系企業が強みを発揮することで、台湾のローカル企業と互いに補完関係を構築し、台湾市場から中華圏市場へ事業展開も検討できるのではないかと。

(林宜蓁 : y2-lin@nri.co.jp)